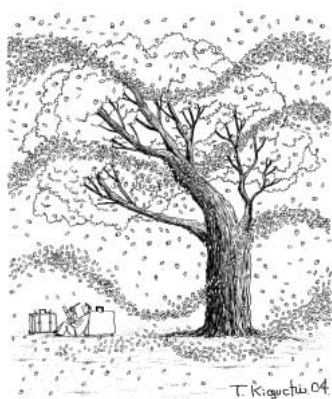


第 1 章

国境を越える



1 ゆく春のなか都を離れる

■前途三千里のおもひ胸にふさがりて……

松尾芭蕉は、元禄二（一六八九）年、四六歳のとき奥州への旅に出た。江戸を出発したのは、三月の末である。

この時代の長旅の困難さは、想像に余りある。途中で命を落とすことも、ありえたらう。『おくのほそ道』では、「上野・谷中の花の梢、又いつかはと心ほそし」と書かれている。少なくとも、江戸帰還が確実でないことは、覚悟していたに違いない。

芭蕉と、同行の曾良は、隅田川を舟で漕り、千住で降りて日光街道に出た。

「千じゆと云所いふところにて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸なみだにふさがりて、幻のちまたに離別の泪なみだをそぐ」という一語一語は、旅に出る者の心に突き刺さる。

「前途三千里のおもひ胸なみだにふさがりて」とは、なんとという赤裸々な感情の露呈たけぞだろう。これこそは、

いつの時代においても、住みなれた場所を離れようとする者の共通心理なのだ。

このとき芭蕉は、次の句を詠んで、「是を矢立やたての初として」（これを旅の第一句として）とした。

行春ゆくばるや鳥啼魚とりなほの目は泪なみだ

鳥が鳴くのはいつものことだし、水中に住んでいる魚の目が濡れているのも当たり前だ。しかし、このときの芭蕉には、鳥も魚も、去りゆく春を惜しんで泣き、涙を流していると思えたのである。

だから、この句は、驚くほど現代的なシユールレアリスム感覚に満ちている。しかし、そうした異様さがまったく感じられないほど、自然だ。それほどに芭蕉の心は、江戸を旅立つ思いに揺れ動き、平静を失ってしまったのである。

それから約二〇〇年後の明治二六（一八九三）年、一二歳の鳥崎藤村は明治学院の教職を辞して、半年にわたる関西漂泊の旅に出た。

一八八九年にはすでに東海道本線の新橋―神戸間が全通しているから、鉄道旅行も不可能ではなかったはずだ。しかし、この当時、列車で旅をするのは一般的でなかったのだらう。『櫻の實の熟する時』で藤村は、「ところどころ汽車にも乗って」とは書いているが、最後に、「足袋も草履も濡れた。まだ若いさかりの彼の足は、踏んでゆく春の雪のために燃えた」と書いている。彼は京都までの行程の大部分を歩いたのである。

そして、藤村が旅に出たのも、やはり春だった。「櫻の實……」のなかで『おくのほそ道』を長々と引用している。彼もまた、「前途三千里のおもひ」に胸を塞がれていたのだ。

住みなれた生活を捨てて旅に出る者が、その労苦を思つてたじろいだとき、救いを求めるのは『おくのほそ道』と、昔から決まっていたようだ。

■年度の始まりは、異常な季節であるのが望ましい

「新年度の始まりは、どの季節がよいのだろうか」と書いたことがある（「九月新学期制が日本を変える」、『日本にも夢はあるはず』、ダイヤモンド社、二〇〇二年）。会計年度は多くの国で暦年と同じく一月が始まりだし、学校の年度は九月開始が世界標準である。日本では、会計年度も学校の年度も四月から始まる。これは世界標準とずれているので、最近ではいろいろと不便なことも多い。それにもかかわらず、桜の花で落ち着かないこの時期こそ、日本での年度の切り替えにはふさわしい。

それまで一緒に仕事をしていた人たちと、別れる。友人たちも入れ替わる。それは、桜の花が咲き、そして散つてゆく時期と合っているのが、いちばん適切なように思われる。喧騒のなかの異常な雰囲気、いささか常軌を逸した気分になれる時期にこそ、人は大きな断絶に耐えられる。秋だつたら、とうてい耐えられないだろう。

そういえば、広陵に赴く孟浩然もうこうねんを送る李白が、

故人西の方黄鶴楼を辞し

烟花えんか三月揚州に下る

と詠んだのも、やはり春爛漫の花のなかだった。

もっとも、ここでの「花」は、桜ではなく桃である。桜よりあでやかな花が「烟けむり」というほど咲いているのだから、これも異常な季節だ。

孟浩然是、心ならずも武昌を辞して出発してゆくように見える。そして李白は、心から尊敬していた友人を失うことになる。たとえ栄転であったとしても、別れは辛かったろう。それは、見渡す限りの桃の花という異常な環境のなかでこそ、耐えられるものだった。

ところで、旅に出なければならぬ理由を、芭蕉は、「予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず」と書いている。たとえどんなに居心地のよい生活であっても、一つの場所に安住し、最終的均衡点に沈殿してしまうことはできないのだ。

しかし、これは人間の本性に反する行動である。地球規模で回遊する渡り鳥や鯨とは違って、あるいは、獲物を求めてどこまでも走る豹や狼とは違って、多くの人間は、牛や羊のように決まった場所での安住を求める動物なのだ。

■なぜ住みなれた土地を離れるのか

じつは、私も日本を離れ、アメリカでの生活を始める。行き先は、カリフォルニア州パロアルト（サンフランシスコの南三〇キロメートルほどにある町）だ。スタンフォード大学で客員教授として一年を過ごす。

私の場合、芭蕉や藤村のような徒歩の旅ではなく、飛行機の座席に収まってひと眠りすれば、八〇〇〇キロメートルを超える旅を終わってしまうという、申し訳ないほど楽な旅だ。また、藤村や孟浩然のように、複雑な背景があつての旅立ちでもない。期間も一年間とあらかじめわかっている。

いや、それどころではない。三〇年前に留学生として在米したときと比べてさえ、地球は小さくなった。用事があれば、日本に短期間帰ることもできる。インターネットで日本の事情も簡単に知ることができ（雑誌連載さえ、インターネットを利用して続けることができる）。

しかし、そうであっても、住みなれた土地を離れる気持ちは同じだ。なぜ今までの生活を続けるのか？ なぜ、言葉も生活慣習も異なる土地に、好き好んで出かけるのか？ なぜ、知らない人がほとんどの土地で生活するのか？ そう聞かれても、満足に答えられない。

私はたぶん、牛・羊的傾向を普通の人より強く持っている。だから、本当は日本を離れることなど考えられない人間なのだ。

思えば、芭蕉や藤村も同じだったのだ。狼は、旅立つに当たって感傷的な歌など作らないもので

ある。だから、私も芭蕉も藤村も、桜の咲き乱れる異常な季節にしか、本能に反する行為を実行できないのである。

半年ほど前から、「出発まであと何日」と数えていた。それは、結婚式を待つ乙女の気持ちではなく、執行日待つ死刑囚の気持ちである。それがとうとう最終段階になった。じつをいうと、本来に旅立つことができるのかどうかすら、信じられない。なにか重大事が起こって、渡航が不可能な事態にならないものだろうか……。

いやいや、白昼夢にふけているわけにはいかない。心を強くして、この一年間を有意義に過ごさなければ。

アメリカでは、いくつもの大きな変化が起こっている。就業形態の変化や海外アウトソーシング、そして二一世紀型のグローバルゼーション等々。その中心が、シリコンバレーだ。スタンフォード大学は、地理的にその中心であるばかりでなく、人材供給の点でも中心的な役割を果たしてきた。その地で何が起きているかを、つぶさに見てきたいと思う。

2 世界は本当にボーダレスになったか

■大変な苦勞をしたビザ取得

世界は「ボーダレス」になっただろうか？ つまり、国境は消滅しただろうか？ 少なくとも、その方向に向かいつつあるか？

確かに、ボーダレスになった地域はある。その代表は、ヨーロッパだ。「列車に乗り、うとうとしているあいだに国境を越え、着いた駅は別の国」ということは珍しくない。冷戦の終結によるベルリンの壁の崩壊後は、かつての東ドイツにも簡単に行ける。EU共通通貨導入後のヨーロッパにはまだ行かなかったことがないが、ボーダレス感がいつそう強まったであろうことは、疑いない。

しかし、世界には、そうならない地域もある。その代表は、アメリカ合衆国である。特に、九・一一以降、アメリカへの入国審査は厳しくなった。

アメリカ滞在のためのビザ取得が特に困難になっていることは、日本の新聞でも報道されている。半年たつてもまだビザが下りないという日本人研究者の例や、アメリカのビザを得られず、やむなくヨーロッパに留学先を変えたという中国人学生の例などが報道されていた。

私も、ビザ遅延の可能性を考え、出発を半月ほど遅らせたほどだ。幸い、実際には短時間でビザを取得できたのだが、そこに至るまでは大変だった。

まず、ビザ申請のために必要な書類（私の場合にはDS-2019というもの）をスタンフォード大学に作成してもらおう。ごく簡単な書類だが、一カ月以上という信じられない時間がかかった（もっとも、審査に時間がかかったのではなく、単に事務手続きが鈍^{のろ}かっただけのことだが）。

それが届いてから、アメリカ大使館への申請手続きを開始する。まず、インターネットで大使館にアクセスして、面接の予約を取る。次に、大使館のサイトから必要な書類をダウンロードして、そこに必要事項を記入する。

この「必要事項」たるや、「過去一〇年間に渡航したすべての国を列挙せよ」「過去一〇年間にアメリカ合衆国に入国した年月日をすべて記入せよ」などというものから、「高校から大学まで、卒業した学校の住所と電話番号を記入せよ」「過去の職歴、会社の住所、職務、上司などを記入せよ」等々、簡単には記入できない項目がいくつも並んでいる。

これほど面倒な申請書類を作成したのは、初めての経験だった。面接の前日には、家族揃って、記入に誤りがないかどうかを綿密にチェックした。

いよいよ面接日に虎ノ門のアメリカ大使館に出かけると、路上に長い行列ができています。門の外で待たされているのだ。ここで約三〇分間行列し、構内に入ってからまた屋外で約三〇分間行列させられた。この間、立ったままである。幸い、それほど寒くも暑くもない日だったが、真冬や真夏

なら大変なことだろう。

やっと建物の中に入ると、今度は病院の待合室のような満員の部屋で、約二時間待たされた。幸い椅子を見つけたことができたが、大病院も顔負けの混雑である（もつとも、大変だったのは待ち時間だけで、いざ呼ばれたら「面接」は一〇秒ほどですんだ）。

■国境はむしろ高くなった九・一一以降の世界

三十数年前、留学生ビザを取得したときには、大使館に出向いた記憶さえない。アメリカ入国は、このときに比べて、明らかに難しくなっている。

ビザ取得が難しくなったのは、言うまでもなく、テロ警戒のためである。テロとはおよそ無関係な日本人で、しかも受け入れ先からの身分保証がきているにもかかわらず、こうした状況なのだ。そうでない場合の困難さは、想像に余りある（もつとも、「ビザが取れただけ、ありがたい」ということなのだろう）。

ヒトだけでなく、モノについても、さまざまな制約がかけられている。とりわけ厳しいのが、医薬品の輸入だ。これは、バイオテロ警戒のためである。

別送の荷物を送る際に、運輸会社から「薬を入れないように」と注意された。また、薬を持っていたために厳しい取り調べを受けたり、没収されたという話も聞いた。私は常備薬を携帯する必要